

## 八幡門前自治会がある地区の歴史小話（令和4年12月） 回覧

### 16（完）. この地の方言

今でこそ、首都圏の住人として共通語（放送で地域を越えて使われる話し言葉）、標準語（正しいと認識されている書き言葉的要素が強い言葉）で話しているが、昭和30年代初期は関東の「べいべい（べえべえ）言葉」が飛び交っていた。私は京都生まれであり、この地の言葉の荒っぽさ、汚さは5歳の子供心に深く刻まれている。

具体例を挙げると「ベーゴマ やんべえ（ベーゴマ やろう）」「神社に行くべい」「もうおせえからけえんべえ（もう遅いから帰ろう）」「そうだんべえ」などである。

約400年前に来日したイエズス会の宣教師ジョアン・ロドリゲスは『日本大文典』（1608年、土井忠生訳）で、「東国は物言いが荒く、鋭いこと、粗野な語が沢山ある」と総論を述べた後に、「直接法の未来には盛んに助辞「べい」を使う。例えば「参り申すべい」「読むべい」「習ふべい」など」と具体的に記している。

語尾の「べいべい言葉」に加えて、接頭語が強力で、強く発するのも関東方言の特徴である。「おっぺす（押す）」「おっぱじめる（はじめる）」「ぶっこわす（壊す）」「ぶつとばす」である。粗野で乱暴な印象を持つのも無理はない。

日本は方言が多い国で、狭い地域、社会階層ごとに違いがあった。これは江戸時代の幕藩体制が地方分権で、庶民は伊勢参りなどの信仰の旅を除いて移動が制限されていた為である。また身分社会であり、武士と町民、農民で言葉が違うこともあった。テレビ・映画の時代劇を、時代考証をきちんと行った台詞で演じれば意味不明になるだろう。

千葉県の方言も学説によって差異があるが「東南部関東方言」「下総西部方言」「下総東部方言」「安房・上総方言」などと分類されており、市川市でも北国分、大柏、行徳で小異があり、宿場町八幡では江戸下町方言も入っている。

八幡歴史小話11、12で八幡宿は江戸からの距離が約24kmと短く、宿泊する人は少なく、船橋で宿泊する人が多いことを記した。この一因に「べいべい言葉」に由来する船橋の風俗が関係しているのである。

江戸時代後期には成田詣、三社巡り（鹿島神宮、息栖神社、香取神宮）が盛んになる。江戸の信仰旅行には聖に俗が付きもので、参拝後の精進落としと称して、男は遊郭で遊ぶのが楽しみであった。伊勢詣では古市（妓楼70軒、遊女1000人、浄瑠璃小屋も数軒）が有名であり、成田詣では船橋が該当した。ここの宿屋（時代によって差異があるが25軒ほど）の飯盛女は「八兵衛」と呼ばれていた。これは飯盛女が「しべえ、しべえ」とうるさく付きまとうから「し（四）」と「し（四）」で”八”兵衛になったとか、参詣の行きに「しべえ」か、帰りに「しべえ」かが語源という説もある。こんな戯れ句が伝わる。「名を聞けば八兵衛と云う女郎也」「八兵衛を買わざるなるまい成田道」。なお「成田参詣は夫婦で出向くと御利益が無い」などの俗説も広まったようだが、これは男の都合から生まれたものである。

#### 【八幡歴史小話の完結にあたり】

2021年9月から、この地区に愛着を持っていただきたいと念じて、連載をはじめましたが、今回の第16話で一段落といたします。お読みいただき、ありがとうございました。愛着を持って頂ければ美化にも関心が向き、地域を良くする提案も生まれるでしょう。